

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

(第2期6号-通巻第18号-)

Working Paper Series 2-6-3

2011年10月30日

特集：「『宇野理論の現在と論点
--マルクス経済学の展開』III 「段階論と現状分析」
書評とリプライ」

特集論文3

宇野三段階論の現代的意義--吉村信行氏への回答

大内 秀明

(東北大学 名誉教授 ouchi_at_miyakencenter.or.jp)

http://www.unotheory.org/news_II_6

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

事務局：東京都練馬区豊玉上 1-26-1 武蔵大学 横川信治

電話：03-5984-3764 Fax：03-3991-1198

E-mail:contact_at_unotheory.org

ホームページ <http://www.unotheory>.

宇野三段階論の現代的意義—吉村信行氏への回答

大内秀明

要旨

- 1) 「新自由主義による思想支配」をめぐって
- 2) 世界資本主義 VS 純粹資本主義、純粹資本主義は一國資本主義ではなく、周期的景気循環に即した歴史的・現実的抽象である。
- 3) グローバル資本主義は、資本主義の新たな発展段階とは言えない。ポスト冷戦による市場経済のグローバル化と米・一極覇権主義のネオコンのイデオロギー
- 4) ポスト冷戦と段階論・現状分析、段階論と類型化としての抽象、『資本論』と社会主義の再検討およびW・モリス『社会主義』の意義

本文

1) 吉村氏の拙論への批判であるが、「内容の紹介」と「論評」から構成されている。「紹介」については、拙論をたいへん丁寧に、かつほぼ正確に内容を紹介されている。筆者としては、内容紹介の労を執られたことに、はじめに厚く感謝の意を述べたいと思う。とくに、拙論は「H君への手紙」の形式で書かれているため、いわゆる学術論文と異なり、紹介しにくい面があったことは、十分想像できる。にもかかわらず、ほぼ正確な紹介をして頂き、重ねてお礼申し上げます。

お礼を述べたついでに、なぜ他の論稿と異なり、H君への手紙の形式にしたか、その理由について説明しておこう。手紙の形式は、宇野さんのZ君への手紙が有名だが、大内力さんも手紙形式で書いておられる。書き易い面を持っているが、拙稿の場合、H君は実在、元気で生存の人物である。「直接にメール」を貰ったのも事実で、彼は全共闘派の学生時代から、宇野弘蔵のファンで、いわゆる研究者ではないが、宇野理論をよく勉強してきた人物である。そんな関係で、拙著も沢山読んでもらった貴重な読者であり、メールで宇野理論をめぐってのやり取りをしている。

そんな関係で、07年12月の武蔵大学での「宇野理論を現代にどう活かすか」の研究集会にも誘ったのである。帰宅して、彼は直ぐに小生にメールをよこし、拙稿に引用したとおり「私は、自称宇野派だが、実際の宇野派の先生方の難しい話を聴いていると、宇野

派を自称する自信がなくなる。」さらに「四〇年前と違って、この議論で若い人が宇野理論になじむかと思うと、とてもそうは思えないのであった。」

研究集会の議論の内容に多少の危惧は持っていたが、ここまでメールに書かれるとは思ってもいなかった。正直に言ってショックだった。そこで、編集者とも相談の上、このメールの紹介の意味もあり、Newsletter(10)に手紙形式で書かせて貰った。その後、本書の出版の話があり、寄稿の依頼を受けたので、「手紙形式で書いた Newsletter に加筆するのでよければ」と云うことで、拙稿を準備提出したことを、念のため書いておこう。

ただ、吉村氏も手紙の形式を批判されてはいない。手紙の形式のために、「自由な思考」で書ける面があるが、論点の不明確になっている点を指摘されたのであろう。その点は、氏の批判に回答したいと思うが、むしろ問題はH君のような「四〇年前からの自称宇野派」が自信喪失するような、宇野理論の現状をどう見るかであろう。

吉村氏の拙論に対する批判からすると、「21世紀の今日を取り巻く情勢は」「30年前」の時代とはすっかり変わってしまっていて、「硬直的スターリン主義」は無論のこと、いわゆるマルクス・レーニン主義、そして「社会民主主義やケインジアン」も「悉く駆逐しあるいは変質させてきた」。それに対する「認識・言及を欠いたまま」の拙論では、三〇年前のような「既視感を覚えるのは、評者ひとりだけであろうか。」そして、「四〇年前」どころか、「30年前」の状況を一変させたのが、「この20年」「率直に言って、冷戦による<敵失>によって驕り高ぶった新自由主義による思想支配」であって、それに対する「認識・言及」が無いまま、マルクスやモリス、そして純粋資本主義 VS 世界資本主義の宇野理論の内部論争など意味ない、と論断されるのであろう。

東北大学を退官して二〇年になり、「この20年」の「新自由主義による思想支配」の大学の現実、正直に言って実感が薄い。いわゆる近代経済学の側から「今やマル経は絶滅危惧品種になった」と言われているそうだし、若い諸君から大学の人事について悲鳴に近い話を聴く。「泣き言いわずに頑張ったらいいだろう！」と腹の中では思いながら、同情の言葉を交わす程度に留まっている。ただ、ポスト冷戦の「この20年」の「新自由主義による思想支配」は、いわゆる「グローバル資本主義」と結びつきながら、アメリカのネオコンを中心とした世界支配の末期症状のイデオロギーに過ぎないと思ってきたし、すでに民主党オバマ政権の登場で変わってきているのではないか？

そんな訳で、H君が自信喪失するような宇野理論の現状の一因として、小生自身の非力も反省するが、純粋資本主義 VS 世界資本主義を始め、色々な論点を十分議論を詰めないまま、世代間の断絶が深まってきている事情が大きいように感じている。今回の「宇野没後30年」の研究集会をはじめ、記念出版などを通して明らかにされたのが、「世代間断絶」と言われている。すでに全員が物故されてしまったが、第1世代の内部分裂が、いわゆる「宇野派解体」をもたらした。それに巻き込まれた、われわれ第2世代、それと第3世代の間には、「驕り高ぶった新自由主義による思想支配」の大学への影響もあったかも知れぬが、日本におけるマルクス主義のガバナンス喪失によって、脱マルクス・脱宇野理論現象が生じ、世代間の断絶を助長したのかも知れない。ただ、戦後それまでは、欧米先進国では例の無いマルクス経済学の学界支配があっただけに、その反動が異常に大きかったのではないかと感じている。

2) <補注>の形で岩田弘氏の拙著『恐慌論の形成』への批評に答えたが、それについても若干の事情説明をしておきたい。拙稿は提出が早かったこともあり、原稿の提出から出版まで、2年近いブランクがあった。「予定と違って発行が大変遅れ」たからだが、そのブランクの間に、岩田氏からの批評が小生の手元に届いた。先輩に書評の労をとって頂いたので、何らかの形で返事をしたと思いつつ、補注として書かせてもらうことにした。

ただ、岩田流で内容的には拙著の書評というより、「『資本論』体系の苦悩と宇野恐慌論の仮想性」のサブタイトルの通り、宇野・恐慌論批判であって、しかも「内容は30年前と殆ど変わらぬ蒸し返し」だった。しかし、それだけに岩田・世界資本主義論が誕生する時点に遡って、宇野・恐慌論との論点を紹介するチャンスにもなると考え、拙稿の補注に置くことにしたのである。従って、われわれ世代の宇野ゼミでの議論を回顧する意味もあり、始めから「30年前」への後ろ向きの論点整理であるのは百も承知の上のことである。30年前に遡って、岩田・世界資本主義の恐慌論と宇野・純粋資本主義の恐慌論を対比し、論点を詰めてみる事ができれば、と思いつけてきたのである。

今回、「宇野恐慌論の仮想性」として、宇野批判を繰り返しながら、岩田・恐慌論が体系的に展開されることを期待した。また、体系的に纏められたように見えるのだが、しかし内容的には、上記のように昔と殆ど変わらない点で、期待外れといえれば期待外れであった。厳しい表現の宇野批判に見えながら、結局のところ骨格も、その論理展開も、基本的に宇野・恐慌論と変わらないのであって、だから拙稿の最後にこう書いたのを注意して欲しいと思う。「純粋資本主義論の法則解明の宇野恐慌論とは、基本的内容は変わらないのであり、結果的には空疎なレッテル貼りに終わったと、言えるだろう。」

そして、30年前どころか50年以上も前になるが、宇野ゼミで机を並べ、喫茶店で粘り、さらに下宿に押しかけ、夜を徹して議論してもらった「学恩」を忘れてはいない。岩田氏があつての宇野ゼミだったし、宇野理論の学習でもあつた。だから最後に、「30年を振り返って、いささか不肖（詳は誤記又は誤植）であっても、岩田氏もまた宇野理論の弟子、息子であることの鑑定結果を、今回の論稿が証明してくれたと思う。」これが拙論の心情を込めての結論なのである。

補注の真意は以上だが、世界資本主義論 VS 純粋資本主義論の論争点で、念のため再説せざるを得ないのは、1) 岩田氏の批判が、依然として純粋資本主義を「一国資本主義」、それに対置して世界資本主義論を展開されている点である。ひとり岩田氏だけではないようだが、われわれ純粋資本主義論の立場からすれば、世界資本主義 VS 一国資本主義の図式で、純粋資本主義論を批判されても、拙稿で力説したとおり、それは「誤解」、むしろ「曲解」とする以外に、答えようが無い。

『資本論』では、イギリス資本主義の発展を中心に、純粋資本主義を抽象しているので、それを念頭に置いての批判かもしれないが、『資本論』でもイギリス一国だけからの抽象ではないと思う。イギリスの発展が仏や独にも拡大し、世界恐慌が繰り返される現実が強調されているからだ。当時の世界市場での資本主義の発展からの抽象だと思う。純粋資本主義の抽象は、イギリス中心に世界恐慌として、周期的に景気循環が繰り返されている、その資本主義の自律的発展、それが歴史的・現実的な純粋資本主義の抽象なのだ。それがまた、観念的抽象から区別された「方法模写論」と呼ばれる現実的・歴史的抽象に他なら

ない。この点は、拙著『恐慌論の形成』補論「経済学史における理論と思想」を参照されたい。

この抽象の意義を無視、ないし否定してしまえば、世界資本主義 VS 純粋資本主義が、世界資本主義 VS 一国資本主義に摩り替わるし、純粋資本主義論を批判されることになるのであろう。拙著でも、また拙稿でも、上記のように周期的恐慌を含む景気循環に即した抽象を、現実的・歴史的抽象とした。そして、『資本論』などに見られるように、イギリス資本主義の拡大発展を、さらに「延長」させて純粋資本主義を「想定」する「拡大延長論の方法」と区別した。それに対して、吉村氏は次のように批判される。

「<純粋化傾向>（不純な要素の捨象）と資本主義の<自律性>（内面化）とが<純粋資本主義の抽象>方法として表裏一体であるとするこうした理解は、なにも大内氏の独自の創見ではなく、広く純粋資本主義論を採る論者に共通のオーソドックスな理解であったと思われるが、ここで大内氏が、いつの間にか原理論の抽象法をむしろ世界資本主義論寄りに資本主義の<自律性>の方に修正している点について、もう少し説明がほしかった。」

ここで吉村氏は、世界資本主義論＝「自律性」、純粋資本主義論＝「純粋化傾向」という二分法を持ち出されている。この二分法は、初めてお目にかかる分類で、いささか戸惑っているが、拙論が当初は「純粋化傾向」を強調し、「自律性」を批判していた。ところが、「いつの間にか」「世界資本主義寄り」に変節して、「自律性」を強調するようになつた、と云う批判である。この批判は、正直に言って小生にとって全く身に覚えの無い中傷であつて、「もう少し説明がほしかった」と言われても、なんとも説明の仕様が無い。そこで、吉村氏には失礼になるかも知れぬが、やや解説的な説明を加えておきたい。

そもそも純粋資本主義の抽象による原理論、そして恐慌論の前提条件として、1) イギリスを先頭とする資本主義の発展による確立、2) 「政策なき政策」の経済的自由主義政策、3) 周期的恐慌を含む景気循環、といった条件が挙げられてきた。ただ、これだけでは純粋資本主義の原理論や恐慌論のロジックは展開できない。現実の発展からの上記の「抽象」が必要であり、『資本論』では自然科学の実験室の例など挙げてマルクスも苦勞していたが、説明が不十分、不徹底だった。そこで、宇野さんが上記の単なる模写論ではない、「方法模写論」を提起し、「三段階論」の方法に整理されたのである。だから、「抽象」を認めるか否かが問題であり、資本主義の発展が「世界」か、「一国」か、の区別ではないのだ。

総じて世界資本主義論、というより純粋資本主義を否定する論者に共通するのは、この「抽象」を認めたくないらしいことだ。抽象を、頭から観念的と思いついでいるように見えるし、だから純粋資本主義の抽象を認めようとしなないのだろう。ただ岩田氏は、世界資本主義論を主張される際、拙稿でも指摘した通り、世界資本主義の発展について、その外面的発展と同時に、「内面化」を強調されるようになった。宇野ゼミの内部で、岩田氏の内面化は、結局のところ宇野理論の純粋資本主義の抽象と同じものになるのではないかと問い続けてきた。内面化が、純粋資本主義の抽象と同じなら、岩田・原理論も岩田・恐慌論も、内容的には宇野・原理論および宇野・恐慌論と大差ないもの、そして今回の岩田氏の論稿でも、いろいろレッテル貼りは賑やかでも、それは「世界資本主義論の苦悩と岩田・恐慌論の実体」と言わざるを得ないほど、内容は宇野・恐慌論に近いと読んだ。だから結論的に「岩田氏もまた宇野理論の弟子、息子である鑑定結果」とした訳である。

3) 拙稿に対する吉村氏の批判のもう一つの論点、「グローバル資本主義」についてだが、小生もグローバル資本主義の用語について、とくに疑問視しているわけではない。ポスト冷戦により、東西二つの世界が一つになり、文字通り世界市場が地球的規模に広がったからである。そうした特徴を、グローバル資本主義と呼んで差支えないし、ジャーナリストには適当な表現なのだろう。

ただ、この種の表現には、多かれ少なかれ一定のイデオロギーが反映される嫌いがある。グローバル資本主義にも、アメリカの新保守主義、いわゆるネオコンのイデオロギーが纏いついていて感じていた。もともとロシア革命以来、世界史の認識として、マルクス・レーニン主義、とくにスターリンなど、資本主義による世界市場の全面的支配が、ソ連の一国社会主義で崩れ、「全般的危機」を迎えた。さらに、戦後の冷戦下は、東西対立で全般的危機が一層の深化をみた、と云う認識があった。こうした全般的危機論は、宇野・恐慌論と対立する実現論的恐慌論に基づいた危機論＝崩壊論が前提になっていたのだ。

こうした全般的危機論が、ポスト冷戦で失効したわけだが、対抗的イデオロギーとして、アメリカを頂点とした一国覇権主義の世界支配論が、ネオコンのイデオロギーとなって、グローバル資本主義が主張されたのではなかろうか？だから、特にアカデミックなレベルで、資本主義の段階論として主張されていたとは思われない。例えば、J. ソロスの著作には、グローバル・キャピタリズムが沢山出てくるし、わが「経済理論学会」の共通論題にも登場している。現代資本主義の一つの特徴として、ネオコンの批判的検討とともに、グローバル資本主義が現状分析として重要な課題であることは当然である。

また、拙稿を準備する前後の時期に、グローバル資本主義をめぐり、以下のような議論の機会があったので紹介しておく。ポスト冷戦によるグローバル資本主義に先行して、80年代にはビッグ・バンなど通貨・金融面での改革があり、それに続いて今世紀に向け「産業の実体面での安定性を実現する根拠となった産業グローバリゼーション」の動きが注目された。とくにIT革命による産業面での変革が、アメリカではモジュラー型、日本ではインテグラル型「ものづくり技術」となって、広くBRICsまで拡大した労働市場を基礎に、資本主義の新たな発展を重視する見解が提起されることになった。こうした資本主義の発展は、ネオコンの米一極覇権主義のイデオロギーを越える動向であることは言うまでもない。

吉村氏が明示してはいないが、「宇野理論に様々な局面を設けて、現代資本主義の時期区分を苦心しながら試行しているのもそうした試みのひとつ」になるのかも知れない。そして、そうした苦心の試みを全く無視して、拙稿がグローバル資本主義を批判しているように受け取られているが、小生もIT革命のポスト工業化による「知識社会」への発展とともに、産業面での動向に無関心だった訳ではない。上述の新しい動向を重視していた柴垣和夫氏、それに神野直彦氏と小生の三人で、座談会「現代資本主義の歴史的位相と変革への道」(『生活経済政策』08年7月号)を論じ合った。柴垣氏が、サッチャー・レーガン政権まで遡り、ネオリベラリズムの登場、ポスト冷戦、IT革命など、グローバル資本主義の新たな発展を積極的に位置づけられた上で、小生の質問に対して柴垣氏の回答は以下の通りである。

「そうするとグローバル資本主義なるものは、従来の資本主義の発展、つまり福祉国家型に替わるべき新たな発展、あるいは新たな段階と考えていいのですか」に対する柴垣氏の回答は、「私も一時は資本主義の新しい段階かもしれないと考えたことがあります。支配的な資本が金融資本であることには変わらないけれども、金融資本のタイプが変わることに対応していると言っているのかなと考えた時期もあったのですが、今度の論文（『政経研究』No. 90）ではそれは撤回した」と発言されている。

つまり、柴垣氏の場合、通貨・金融面から始まったグローバリゼーションが、ポスト冷戦を迎えて、産業面さらに労働市場のグローバル化をもたらした。そうした新たな局面も、新しい資本主義の発展段階とは言えない。新たな特徴を示すだけだ、と述べておられるわけで、宇野理論の三段階論としては、正当な方法的処理だと考えている。そして、グローバル資本主義のタームについて言えば、ネオコンなどアメリカ極覇権主義のイデオロギー表現として、それを受け止めるのが適当ではないかと考えている。また、座談会で神野氏は、一方で世界市場のグローバル化が進んでいると同時に、他方では国民国家が大きく「上下に分化する傾向」を重視され、北欧モデルにおける分権化の高まり、そして「福祉国家主義」に代替する地域の分権化が、ポスト資本主義に向かう方向づけとして評価されている。

4) 吉村氏は、小生に「段階論修正論の内容を具体的に提示して論じてもらいたかった」と述べられたが、ここで詳しく述べる余裕は無い。小生は、学生時代から一方で原理論、それも宇野原理論の形成史を中心に研究しつつ、大内(力)ゼミ参加を中心に日本経済論、とくに東北の地域経済分析を続けてきた。いわゆる段階論そのものを専門的に研究したことが無い。原理論を学びながら、日本経済や東北経済の現状分析に必要な限りで、段階論とくに金融資本の研究成果を学ばせてもらってきた。

そうした段階論のユーザーとしての発言になってしまうが、金融資本の蓄積として、アメリカの20世紀に入っての発展、例えば自動車産業など耐久消費財と消費者信用との関連など、金融資本の蓄積として類型化して良いのではないか、と思っている。その他、色々感ずる点が多いが、専門的研究者の業績に敬意を表しつつ、例えばドイツ経済論と段階論としての金融資本の蓄積との区別と関連が、なかなか明確にならないまま、吉村氏が指摘される「時期区分を苦心しながら試行している。」たしかに、現状分析としては、そうした試行錯誤が避けられないと思うが、段階論としての有効性には疑問を感じている。

原理論と現状分析との方法的関連から言えば、段階論も純粋資本主義とは異なる意味で、やはり「抽象」である。宇野・段階論も、吉村氏のいう狭義か広義かはともかく、「類型論」「タイプ化」として、現実からの抽象が考慮されていた筈である。最近も、桜井毅氏などが段階論としての宇野『経済政策論』の形成に関して、スピノザの哲学体系が参考にされた資料を紹介された。（＜『資本論』と私＞所収）また、戸原四郎夫人などの手で、段階論をめぐっての興味深い座談会の記録（『宇野理論の現在と論点』所収）も発表された。これらが、純粋資本主義論のそれとは違ったレベルでの段階論の抽象の方法として、十分詰められた議論に発展すれば、と期待している。段階論に「様々なく局面」を設けて、現代資本主義の時代区分を苦心しながら試行する努力を否定するつもりは無い。しかし、金融資本の蓄積様式の抽象的規定が基準にならないと、単なる歴史学、とくに実証史学と経済学の現状分析との違いが、不明確になるばかりではなかろうか。

段階論と現状分析の方法の混乱が生じた最大の原因は、吉村氏も念頭に置かれていると思うが、やはりロシア革命と旧ソ連の世界史的立場づけであろう。言うまでもなく宇野さんの「狭義の段階論」が、第一次大戦とロシア革命で終わり、旧ソ連の社会主義の存在によって、方法的に現代資本主義の変化を現状分析の領域とされてきた。しかし、ソ連は崩壊した。そこから「広義の段階論」も主張されるし、上記「グローバル資本主義」の段階論の試行錯誤や「換骨奪胎」も行われるのであろう。（拙稿「現代資本主義論の焦点—ソ連・東欧体制の崩壊と宇野三段階論」『現代の資本主義：構造と動態』所収）

それだけに、ここで改めてロシア革命の歴史的意味を問い、ソ連崩壊についての総括が必要であろう。とくに、マルクス経済学としては、教条としてのマルクス・レーニン主義の批判的再検討が不可避だが、それとの関連において、宇野三段階の方法についても、総点検が不可避だと思っている。その際、宇野さんの『資本論と社会主義』の学説史的検討が必要であり、われわれ「宇野学徒」としては、その形成史に踏み込むべきだと考えている。とくに、エンゲルスとは対抗的に、「共同体社会主義」を『資本論』を基礎に主張し、国家社会主義論に対決して止まなかったW・モリスの『社会主義』を研究していることを、念のため書いて置きたいと思う。